

ブラジル近現代史の中の「日本文化」表象

著者	根川 幸男
雑誌名	創立20周年記念国際シンポジウム日本文化研究の過去・現在・未来 新たな地平を開くために
巻	32
ページ	65-76
発行年	2009-03-03
その他のタイトル	Burajiru kingendaishi no naka no "Nihon bunka" hyosho
URL	http://doi.org/10.15055/00002524

ブラジル近現代史の中の「日本文化」表象

根川 幸男 NEGAWA, Sachio

ブラジリア大学 (Universidade de Brasília)

0. はじめに

国際的な「日本文化」研究の新たな地平ということを考える場合、世界最大の日系コミュニティを持つブラジルは、数えきれないほど多くの素材や課題を提供している。日本からブラジルへの移民とコミュニティの形成は、日本人の「新世界への参加」¹のもっとも重大な事件であり、重要な要素の一つである。その事件の文明的価値を問いなおす意味でも、ブラジルの「日本文化」研究はますます重要性を増していると言える。例えば、ここで取り上げるブラジル近現代史の中で「日本文化」がどのように表象されてきたかというテーマもその一つである。

ブラジル日系移民史は、日本近現代史とブラジル近現代史の交錯部分であり、文化的な土壌を異にする地域に、「日本人」「日本文化」が移植され再創された事例として大きな意味と価値を有する。2008年に日本移民百周年を迎えるブラジルにおいては、この機に日系移民史の見直しと総括の必要性が議論されている。この1世紀にわたる歴史の中で、「日本人」はブラジル社会において常にマイノリティであり続け、「日本文化」もまたしばしば負の価値を背負わされてきた。ただ、そういった位置付けは、今転換期にさしかかっていると言える。現在ブラジルにおける「日本文化」のもっとも顕著なプレゼンスは、伝統芸術、武道、舞踏、映画、料理、ポップカルチャーなどの文化表象²であり、それらは多分に正の価値を担わされるようになっているのである。

本稿では、ブラジル近現代史における「日本文化」表象の移り変わりを、便宜上以下のように時代区分する。

1 「ブラジル日本移民70周年祭」記念事業の一つとして1978年にサンパウロで開催された「日伯新時代と国際シンポジウム」における基調講演での梅棹忠夫（当時国立民族学博物館館長）の言葉「われら日本人、新世界に参加す」に拠る。

2 ここでは、「文化表象」を、個人や集団が継承・保持している、あるいは継承・保持していると認識している「文化的」な特殊性や共通性を、記号や象徴を媒介として表現すること、またその表現されたもの、と定義しておく。

1. 戦前・戦中（1945年以前）：ウチに向った「日本文化」継承と表象
2. 戦後（1945-1950年代）：ウチからソトへ向った「日本文化」表象
3. 現代1（1960-1980年代）：「日本文化」表象の多様化
4. 現代2（1990年代以降）：「日本文化」から「日系文化」へ

この四つの時代区分にしたがって、日系コミュニティ側からの自文化表象のあり方を、ホストである非日系ブラジル人からのまなざしとの交渉を視野に入れながら概観・素描する。特に、1) ブラジル近現代史の中で「日本文化」がどのように表象されてきたのか、2) それがどのように「ブラジル文化」として再統合されうなのか、という問題を明らかにすることを目標に、「日本文化」研究の新たな可能性をさぐってみたい。

1. 戦前・戦中（1945年以前）：ウチに向った「日本文化」継承と表象

日清戦争の終結した1895年、日伯修好通商航海条約が締結され、ここに公的な日本ブラジル関係史が幕を開けた。しかし、これによってただちに両者の文化接触・交渉がはじまったわけではない。それは、1908年の笠戸丸による日本人のブラジル移民が開始される時期をまたねばならなかった。

戦前の日系移民は、その人口の大部分が農村部に偏在しており³、その文化表象は、ある時期までブラジル社会において摩擦を生じたり、大きなプレゼンスを持つにはいたらなかった。もちろん、初期のコーヒー農園時代（1910年代）には、ブラジル人や他地域からの移民と同じ耕地に配耕されたため、他のグループとの接触や摩擦はたびたび起ったようである。ただ、1920年代には排他的な日系コミュニティ（植民地）を形成するようになり、宗教活動なども自粛する傾向にあつて、自文化を表象するのはコミュニティの内部（ウチ）にとどまった。

1930年代には、学校の設立や日本人会の組織、邦字新聞の普及など、移民人口の伸長とともに社会・文化活動もさかんになった。特に、1939年には邦字新聞の普及率は100%に近かったとされ、新聞の文藝欄への短歌や俳句、懸賞小説の投稿などを見ると、日系住民の文化的志向は低かったとは言えない。ただ、これらの新聞紙面の相当部分は日本に関するニュースであり、また短期から中期の出稼ぎストラテジーが強かったこともあつて、日系コミュニティは「ブラジルの中の日本」であり続け、積極的に自文化をブラジル社会に向って表象するような性格は持たなかった。つまり、ウチに向った文化継承と表象であり続けたと言える。当時、コミュニティ

3 「国策移民の末期 1940 年に、在ブラジル日本公館の調査では、日本人の約 87%（3 万 6 千家族）は農業に従事していた」（ブラジル日本移民 80 年史編纂委員会『ブラジル日本移民八十年史』〔以下、『80 年史』〕移民 80 年祭典委員会、1991、110 頁）とされているように、日系人口の大部分は農村部に偏在していた。

の中心的役割を果たした日本語学校は「ブラジル学校」に対して「日本学校」と呼ばれ、その多くがやがて帰国することを前提に言語と文化の継承を目的とし、自己のコミュニティ内部で完結したものであった。

一方、日本移民にとってソトの世界であるブラジル社会に目を転じてみると、世界的に人種優生学の議論がさかんであったが、戦前のブラジルでも、概ねそういった議論に基づく「白人化」や「脱アフリカ化」のイデオロギーが強く⁴、有色人種である日本移民の導入自体が歓迎されたものではなかった。ナショナリズム政策との関係で、議会でもしばしば議論されている。また、日本移民導入後も、その閉鎖性や文化的な同化の困難さがブラジル社会ではしばしば問題視された⁵。

やがて、1937年から始まるジェツリオ・ヴァルガス政権における新国家体制下のブラジル・ナショナリズムとの抵触により、同化政策によって抑圧される中、「日本文化」は次第に負のプレゼンスを持たされるようになった⁶。この新国家体制期のブラジルでは、日系コミュニティは、ブラジル社会のキスト（癌）と見なされ、「日本人は硫黄のごとく不溶解である」として非難を受け、ナショナリズムの高揚とともに黄禍論や排日論が叫ばれた⁷。さらに、太平洋戦争中は、日系住民は「敵性外国人」とみなされ、苦難の道を歩むこととなる。

2. 戦後（1945-1950年代）：ウチからソトへ向った「日本文化」表象

日本の敗戦によって、多くの日系住民が出稼ぎストラテジーを捨て、ブラジルでの永住を選択しなくならなくなった。

戦後間もなく起こったいわゆる「勝ち負けの抗争」は、ブラジル社会の中ではじめて大きなプレゼンスを持った日系住民による人種・文化抗争であった。戦中の日系人に対する情報の遮断のため、1945年8月15日を境に、日本の戦勝を信じる人び

4 LEITE, Moreira Dante. *O Caráter Nacional Brasileiro: História de Uma Ideologia* (2ª Ed.). São Paulo, Livraria Pioneira Editora, 1969, 192-194 頁。

5 三田千代子「ブラジルの外国移民政策と日本移民」水野一監修・日本ブラジル交流史編集委員会編『日本ブラジル交流史―日伯関係 100 年の回顧と展望―』日本ブラジル修好 100 周年記念事業組織委員会、1995、99-102 頁。

6 新国家体制とは、ヴァルガスの独裁体制であり、「ポルトガルの当時の独裁者サラザールの下で出現した体制を手本にしたともいわれ、明らかにその頃ヨーロッパを中心に展開していたファシズムの風潮を反映したものであった」また、「ナショナリズムの高揚が、ヴァルガスの独裁体制の特徴の 1 つである」とされ、「その内容は、革命による独裁体制の確立によって国家の統一を推し進め、表面上は民衆の政治参加を強調し、国民共通の意識としての『ブラジリダデ』、すなわちブラジルの民族中心の政策を行うことであった」とされている（住田育法「新指導者ヴァルガス」金七紀男・住田育法他編『ブラジル研究入門―知られざる大国 500 年の軌跡―』晃洋書房、2000、127-128 頁）。また、同体制の移民政策については、「ナショナリズムの高揚が進められる中で、移民の同化政策が実施され、1938 年には移民審議会が設立された。その任務は移民のブラジル化政策である」（同、128 頁）と規定されている。

7 三田千代子「ブラジルにおける『国民国家』の形成と日本移民（1）」In. *Anais do XI Encontro Nacional de Professores Universitários de Língua, Literatura e Cultura Japonesa e I Encontro de Estudos Japoneses, Brasília*, UnB, 2000, 456 頁。

と（いわゆる勝ち組）と敗戦の事実を受け入れた人びと（いわゆる負け組）との間での対立・抗争が起った。この抗争について詳しく触れる余裕はないが、主に勝ち組から負け組みに対するテロにより、23名の死者を出す暴力抗争に発展した事実と、終戦前後の臣道連盟から1954年の桜組挺身隊⁸などの暴力と示威をともなう活動が、文化的に負のプレゼンスとして当時のブラジル社会に受け取られたことは想像に難くない。日系コミュニティ内部でも、この抗争の影響は長く尾を引いた。

戦後のブラジルにおける「日本文化」表象の転換点として注目されるのが、1954年のサンパウロ市400年祭である。サンパウロ市の要請に応じて、この祭典に参加すべく、1953年1月に聖市400年祭典日本人協力会が発足した。これは戦前・戦後を通じてはじめて誕生したブラジル日系コミュニティの統一組織であった。このサンパウロ市400年祭では、日本政府の協力もあり、慶祝親善使節団のブラジル訪問、国際見本市への日本製品の出品、日本切手展、現代日本画展、日本祭りなどが開催された他、イビラプエラ公園内に桂離宮を模した日本館が建設された。

『80年史』は、日系人の400年祭参加の意義を次のように評価している。

400年祭への祭典参加は、戦前・戦後を通じブラジル日系コロニアが示した最大の統一行動だった。この祭典参加で日系コロニアは自信と誇りを回復する。また、統一行動は勝ち負けの対立で大混乱を起した日系社会を收拾し、再統一の端緒となったことでも意義は大きい⁹。

実際、1955年12月には、移民50周年祭への対処を前提に、先の聖市400年祭典日本人協力会の組織をそのまま移行させたサンパウロ日本文化協会（ブラジル日本文化協会の前身）が発足する。この日本文化協会はその基本的路線として、「①在伯同胞の相互親睦と文化的地位の向上を目指しての啓蒙運動、③戦前、戦中、ブラジル国民が持っていた日本に対する誤解と偏見を除去するための積極的日本文化紹介、日伯文化交流事業の促進強化」を謳っている¹⁰。

1958年6月19日、この日本文化協会が中心となり、イビラプエラ公園内の会場に三笠宮殿下ご夫妻を迎え、5万人の日系人を集めて日本移民50周年祝賀会が行われた。これは、戦前・戦後を通じて、ブラジルにおける日系住民による最大の文化表象であった。このような移民祝賀会は、60年祭（1968）、70年祭（1978）、80年祭（1988）

8 1953年3月にパラナ州ロンドリーナで結成された日系政治結社。日本の戦勝を信じ、サンパウロ郊外で集団生活を営み、「国連義勇軍」として朝鮮に行くことを主張。その奇矯な主張と行動から、当局の介入するところとなった。翌54年2月3日には、サンパウロ中心部で「総決起」を敢行。百数十名が揃いの戦闘服にタスキがけで、「四十万同胞総引揚げ」などのスローガンを掲げ、軍歌を歌いながら行進や座り込みを行い、警察から解散命令が出た（『80年史』219-220頁）。

9 『80年史』241-242頁。

10 『80年史』242頁。

と、回を追うごとに大規模化していく。さらに、同協会は1964年にサンパウロ市リベルダーデ地区に本部センタービルを建設するが、これは後にサンパウロ東洋街が形成されるリベルダーデ地区への日系住民の集中を促す大きな契機の一つとなった¹¹。また、同じく日本人協力会を母体に、「日伯の友好・文化交流」を目的にして、1956年11月、日伯文化普及会（通称アリアンサ=Aliança Cultural Brasil Japão）が発足した。

以上のような日系コミュニティの公的な文化表象とは別に、50年代にはサブカルチャーの面でも、「日本文化」のソトに向った自文化表象が始まった。1953年から、サンパウロ市にオープンしはじめたシネ・ニテロイなど日本映画常設館がその一例である。これらの映画館では、「羅生門」（黒澤明監督、1952年、ヴェネチア映画祭グランプリ）や「源氏物語」（吉村公三郎監督、1953年、カンヌ映画祭撮影技術賞）、「純愛物語」（今井正監督、1958年、ベルリン国際映画祭監督賞）など、日本映画の海外受賞作が上映されるようになった¹²。これらの作品の上映は、「日本文化」プレゼンスの拡大に大きな貢献をしたと考えられる。また、こうした日本映画常設館の発展も、後にサンパウロ東洋街という世界最大の日系エスニックタウン形成の重要な契機となるのである。

このように、50年代後半における、日系コミュニティの安定と日系住民の定住ストラテジーの選択、統一組織の発足、日本の経済復興など諸要素の中で、ブラジル社会（ソト）に向った「日本文化」の表象が活発化するようになったのである。

3. 現代1（1960-1980年代）：「日本文化」表象の多様化

こうしたウチからソトへという日系コミュニティの自文化表象の方向転換の中で、60年代以降を特徴づけるのは、戦後移民の増加、日系住民の都市化・社会的上昇と職業の多様化、日本企業の進出ブームなどを背景とした、「日本文化」表象の多様化である。

その中でも、都市化との関係で注目されるのが、サンパウロ東洋街の形成であろう。東洋街は、サンパウロ市のほぼ中心に位置するリベルダーデ地区の商業・観光エリアであり、かつて世界最大の日系エスニックタウンと呼ばれた。この東洋街の形成と変容については別稿¹³において述べたので、ここでは詳しくは触れないが、

11 NEGAWA, Sachio. 「サンパウロ東洋街の形成と変容に関するノート」 In. *Anais do IX Encontro Nacional de Professores Universitários de Língua, Literatura e Cultura Japonesa e I Encontro Latino Americano*, Assis, Unesp, 1998, 243 頁。

12 押田真佐雄「日本映画海外受賞作品、サンパウロでの封切」『コロニア芸能史』コロニア芸能史編纂委員会、1986、244-247 頁。

13 前掲 11 NEGAWA, 1998; NEGAWA, Sachio. “Um Comerciante Japonês: História de Vida no Bairro Oriental de São Paulo”. In. *Estudos Japoneses* 21. São Paulo, FFLCH/USP, 2001, 101-114 頁; 根川幸男「マルチエスニック都市サンパウロにおける『日本文化』の表象—東洋街における新伝統行事を中心に—」『平成 16～17 年度科学研究費補助金（基盤研究 C）研究成果報

次のような三つの契機を経て形成されたことをくり返しておく。

- 1) 1953年7月 日系初の都市型総合娯楽施設「シネ・ニテロイ」開業
- 2) 1964年4月 日本文化協会センター設立
- 3) 1975年9月 地下鉄リベルダーデ駅開通

これら三つの契機は、日系住民の都市化と後に東洋街が形成されるリベルダーデ地区への集客化を加速化することになった。また、各県人会事務所や邦字新聞社のリベルダーデ地区への集中も、日系住民の集中に相乗効果をもたらしたと考えられる。

では、この東洋街の形成の中で、日系住民は、どのような自文化表象を行い、またそれらがどのようにホスト社会であるブラジル社会において認識・受容され、消費されてきたのだろうか。このエリアを中心に行われた「日本文化」表象として、ざっと思いっただけでも、ラジオ体操、盆踊り大会、ミス日系コンテスト、東洋市、子ども運動会、全伯相撲選手権など、さまざまな例があげられる。これらの文化表象の中でも、特に、花祭り、七夕祭り、東洋祭り、餅つき大会という四つの新伝統行事¹⁴を戦後日系コミュニティの自文化表象のもっとも顕著な例として取り上げることができる。

花祭りは、仏誕会とも呼ばれ、ブラジルでは1958年に移民50年祭との関連で始められた。最初、サンパウロ東本願寺境内で開催されていたものが、リベルダーデ商工会（Associação Cultural e Assistencial da Liberdade=リベルダーデ地区を中心とする日系商工業・サービス業者の親睦組織、以下、ACALと略）の招致で1976年から東洋街の中心リベルダーデ広場で行われるようになった。釈迦の誕生日とされる4月8日に近い週の月曜から土曜、リベルダーデ広場で甘茶供養が行われる。最終日の土曜には、各宗派による灌仏法要、仏教婦人連盟によるコーラスの他、釈迦の化身とされる白象の山車とともに僧侶や稚児装束を着た子ども達が続くパレード「お練供養」が、東洋街のメインストリートであるガルヴオン・ブエノ通りで催される。甘茶供養には多くの非日系の人々が並び、お練供養も多くの観客でにぎわう。

七夕祭りは、ブラジル中でもっとも認知されたアジア起源の行事である。この行事は、日本で創出された都市祝祭「仙台七夕祭り」の複製であり、「ブラジル宮城仙台七夕祭り」という名称で開催されている。東洋街では、宮城県人会主催、ACALの後援によって行われ、サンパウロ市だけでなく、サンパウロ州の公認行事でもある。毎年7月7日に近い週末、リベルダーデ広場、ガルヴオン・ブエノ通り、エス

告書—現代ブラジルにおける都市問題と政治の役割』京都外国語大学言語平和研究所、2006、129-140 頁など参照。

14 ゲストであるエスニック・グループの母集団の「伝統」に準拠、あるいはその一部を取り入れながら新たに再編・創出され、ホスト社会側にも認知された行事を、ここでは「新伝統行事」と呼ぶことにする。

トゥダンテス通り、グロリア通りは仙台式の七夕飾りで装飾され、所狭しと露店がたち並ぶ。七夕にちなむ神事の他、ミス七夕コンテスト、郷土芸能、歌謡ショーなどが行われ、六色の短冊に願いを書いて七夕飾りの笹の枝に付ける習慣は、広く非日系人にも行き渡っている。サンパウロ市で行われるエスニック・イベントの中で、もっとも多くの観客を集める行事の一つである。

東洋祭りは、日本各地の郷土芸能のエッセンスである。この意味でも、名称の点でも、他に原型を持たない行事と言える。ACALの主催、サンパウロ市の協賛で、毎年ほぼ12月最初の週末に催される。リベルダーデ広場、ガルヴォン・ブエノ通りを中心に、神輿の巡行とともに、和太鼓演奏や阿波踊り、傘踊り、ヨサコイソーラン、琉球国祭り太鼓などの郷土芸能が披露される。また、中国系・韓国系コミュニティの芸能や武術が招聘されることもある。

餅つき大会は1976年、NHK番組「行く年くる年」での東洋街からの生中継をきっかけに始まった。やはり、ACAL主催、サンパウロ市の協賛で、毎年12月31日午前、リベルダーデ広場で開催される。広場に据えられた臼と杵で、ACAL会員たちとともに、日本文化協会ははじめ主だった日系団体の役員、日系・非日系政治家ら来賓がハッピー姿で餅をつくのが見られる。また、ACAL婦人会によってあらかじめ準備された餅が観客に配られる。

いずれの行事も、「日本食」の露店がたち並び、郷土芸能やポップ音楽のショーなどが行われ、多くの観客を集める。また、サンパウロ市議・州議の他、時には市長や連邦議員、日本国総領事が来賓として出席し、政治的パフォーマンスの性格も見せている。

これら四つの新伝統行事は、戦後1960年代後半から70年代にかけて、東洋街の形成過程で、サンパウロ市旧市街の再開発とともに生み出された「創られた伝統」という性格を持っている。これらの行事がこの時期に創出された要因としては、以下の1)～3)の三つが考えられる。

- 1) 日系住民のブラジル定住と都市化にともなう「新しい家郷」建設の希求
- 2) リベルダーデ地区の日系商工業・サービス業者団体のビジネス振興策
- 3) サンパウロ市の「マルチ・エスニック都市サンパウロ」固有のイメージおよび観光エリア創出の戦略

戦後、定住化・都市化を進めた日系住民は、ブラジルという異郷における「新しい家郷」の建設を希求していた。それは70年代になって、東洋街の形成となって実現する。また、東洋街とそこで行われる行事は、同地区の商店・事業所にとって、集客装置としての役割を果たし、ビジネス振興に寄与している。東洋街形成にはサンパウロ市当局の協力が不可欠であったが、同時期、市当局は新たな観光・文化資源を創出しようとしていた。つまり、東洋街の新伝統行事を含めた「日本文化」表

象は、「マルチ・エスニック都市サンパウロ」という市当局の掲げる観光・文化戦略によって、サンパウロの民族的・文化的多様性を構成する一要素として、より大きな文化の枠組の中に再統合され消費される方向性を持たされていた。これら三つの要因が相互作用することにより、四つの新伝統行事が創出されたと考えられる。

こうした新伝統行事は、日系コミュニティ内部（ウチ）では、準拠集団である母国日本や母県の「伝統」を参照しながら、都市化した日系住民たちが現在の自分達のいる場所に意味を与えていく「日本文化」の再解釈の結果であった。また、そのプロセスにおいて、常にコミュニティの外部（ソト）からのまなざし（異文化表象としての「日本文化」）にさらされ、そのまなざしとの拮抗・交渉の結果として、現在の諸行事が創出された。このように東洋街の四つの新伝統行事は、複数の要因と重層的な戦略によって形成・発展してきたがゆえに、現在サンパウロでもっとも大きな観客数を持つエスニック都市祝祭として賑わいを見せつつ¹⁵、「日本文化」表象と同時に、「サンパウロ文化」、ひいては「ブラジル文化」に統合され、それらを表象する役割も担いつつある。

4. 現代2（1990年代以降）：「日本文化」から「日系文化」へ

つづく90年代は、ブラジルにおける「日本文化」表象のさらなる多様化とグローバル化の時代である。日系ブラジル人の日本への還流（すなわちデカセギ現象）が増加するのも、90年の入管法改正後である。現在、在日ブラジル人は30万人と言われるが、この在日就労の長期化・定住化によって、日本・ブラジル間の人間やモノ、情報の往還が活発化し、日系コミュニティを経由しない「日本文化」の受容と表象が行われるようになった。

また、90年代後半には、衛星放送の開始やブラジルのTVでも日本製アニメーション、子ども向けドラマが放映されるようになり、非日系ブラジル人の間にもサブカルチャーを含む「日本文化」の受容層は拡大した。例えば、TVで日本製アニメ「聖闘士星矢」（放映時のタイトルは「Cavaleiros do Zodiaco」）が放映され爆発的人気を呼び、視聴率調査で14%を記録した。これはブラジルの小学生の相当数が視聴していたことになり、1995年だけで、海賊商品を入れれば、300万個の関連商品（フィギュア）が売れたと言われている¹⁶。北米の地上波から日本製アニメがほとんど姿を消しているに対して、ブラジルでは2007年現在、7作品が放映されている。また、ケーブルテレビもカートゥーンネットワークのほか、アニマックス、ジューティック

15 2006年の七夕祭りの観客数は、主催者である宮城県人会の発表によると、15万人を数えたという（Associação Miyagui Kenjinkai do Brasil. *Relatório Final 28º Festival das Estrelas São Paulo-Sendai Tanabata Matsuri 2006*. São Paulo, AMKB, 2006）。

16 「越境する日本文化マンガ・アニメ 1」『ニッケイ新聞』WEB版 2005年1月21日
<<http://www.nikkeishimbun.com.br/030121-62colonia.html>>

ス、ニコロデオンと複数のテレビ局が日本製アニメを放映している¹⁷。これに加えて、パソコンとインターネットの普及により、日本製アニメやマンガは、コンピュータゲーム、ポップミュージック、コスプレなどとともに複合的に受け入れられるようになっていく。それらはJ-POPと呼ばれ、受容者・消費者は若者が目立つものの、必ずしも若者限定というわけではなく、広い年齢層に広がっている。今やJ-POPは、日系・非日系の境界を越えて、ブラジル人によって大量消費され、再解釈・再生産されているのである。

以上のような90年代後半以降の新たな傾向を背景に、ブラジルの「日本文化」表象は、日系コミュニティにおける一、二世から三世への世代交代や多文化主義的言説によって、長らく定説化していた「日本の日本文化」＝「真正な」日本文化という言説の呪縛からようやく自由になりつつある。最近ブラジルでは、「日系文化」や「新日系文化」という言葉が使われ始めた¹⁸。この言葉は、『日本文化』をベースにブラジル風にアレンジした文化」という意味で使われているが、「日本の日本文化」から自らの「日本文化」を「日系文化」として自覚的に差異化し、多文化的な「ブラジル文化」を構成する一要素として位置付ける姿勢を示している。こういった「日本文化」のブラジルの解釈としての「日系文化」は、ポルトガル語俳句であるHAIKAIに先行的に現われ、BONSAI、カラオケ、YOSAKOIソーラン、マツリダンス（ボン・オドリ・ノーヴォ）、グレイシー柔術、日本式ストーリーマンガなどとして、ブラジルですでに一般化している事例もある。

ただ、「日本の日本文化」＝「真正な」日本文化という言説は、一世世代を中心にまだまだ強く、それに同調する非日系ブラジル人も存在する。この意味で、ブラジルの「日本文化」表象は、「日本の日本文化」への志向と「ブラジル文化」に統合されるべき「日系文化」創出への志向に分岐しているといえよう。

5. むすびにかえて：今後の研究の課題

以上、ブラジル近現代史における「日本文化」表象の移り変わりを、きわめて図式的にはあるが、概観・素描してきた。ブラジル社会における「日本」「日本人」「日本文化」をめぐる研究領野では、まだまだ多くの素材や課題があふれており、「日本文化」研究の地平はブラジルの大地と同じく限りなく広いと言える。以下、筆者の関心領域から、トピック別にいくつかの今後の研究課題について述べたい。

17 「ブラジルのアニメ・漫画市場 JETRO が調査」『アニメアニメ』2007 年 4 月 16 日
http://animeanime.jp/goods/archives/2007/04/_jetro_1.html#

18 この動きとは別に、「日系文化」という言葉は、研究者側から「海外日系社会において、一世がそれぞれの国や地域に持ち込んだ日本文化」が「展開」し、その今日における到達点を示すものとして、エスニック文化研究の術語としても使用され始めている（山本岩夫「はしがき」山本岩夫・ウェルズ恵子・赤城妙子編『南北アメリカの日系文化』人文書院、2007、1-5 頁）。

①「日本文化」の再創と拡散

まず、本稿第3節でふれた四つの新伝統行事の中でも、特に七夕祭りはサンパウロの都市祝祭として発展しただけでなく、空間的にも、サンパウロ州オザスコ、バウルー、レジストロ、リオ・デ・ジャネイロ州ニテロイ、パラナ州アサイ、マリंगा、パラ州ベレン、トメアスーなどブラジル各地、さらにパラグアイのイグアス、アスンシオンへと広がっている。これらの七夕祭りの空間的拡大は、ブラジルにおける「日本文化」のプレゼンスと再創の拡大と考えることができる。このような拡大のプロセスやメカニズムを解明することは、グローバル化する「日本文化」のダイナミズムを知る上で、興味深くかつ重要な課題となろう。

②ミス日系美人コンテスト

60～70年代にはじまったミス日系コンテストなど、かつて日系コミュニティにおいて大きなプレゼンスを持ちながら消滅していった（あるいは別の形式に転化していった）イベントがある。今日的な美人コンテストが日本でもさかんになったのは1950年代からである¹⁹が、ミスユニバースの隆盛などを考えると、ブラジル日系社会におけるミスコンテストの盛衰は、日本や世界のそれとパラレルな傾向にありながら、エスニック・イベントとしての独自性も合わせ持つ。これらがどのように立ち上げられ、ホスト社会（非日系側）からとらえられ、消費されたのか。また、なぜ消滅したのか。ブラジルだけでなく、米国、カナダ、メキシコ、アルゼンチンなど参加国とどのような関係にあったのか。そのような問題について考察することは、日系コミュニティからの自文化表象とホスト社会のまなざしとの関係、その変容をあとづける上で、大きな意味を持つであろう。

③武道・芸能

移民が伝えた「日本文化」の中で、ブラジルでもっとも強固な根を張っているものの一つが日本武道である。空手や柔道、合気道の道場^{アカデミア}は、どんな小さな町に行っても見受けられるほどである。また、グレーシー柔術のように日本に起源を持ちながら、ブラジルで再編・再解釈された武術が日本に逆輸入されるという還流現象も起っている。さらに、ブラジルは芸能分野でも、民謡、日本舞踊、琉球舞踊、浪曲、奇術、盆踊り、カラオケにいたるまでさまざまなものを吸収した。80年代からのカラオケの隆盛と普及²⁰は、二次的にエスニック芸能を再創する基盤となっている。例えば、ボンオドリ・ノーヴォ、マツリダンスと呼ばれるような新しい盆踊りの再創が注目される（パラナ州の都市ロンドリーナでは、每晚3万人がマツリダンスを踊るロンドリーナ祭りが毎年開催されている）。このような武道や芸能をチャンネル

19 井上章一『美人コンテスト百年史—芸妓の時代から美少女まで』朝日新聞社、1997、136頁。

20 ブラジルにおけるカラオケの隆盛と普及については、細川周平『サンバの国に演歌は流れる』中央公論社、1995が詳しく論じている。

とした「日本文化」の受容・再解釈・消費という現象も無視できない。近代日本武道に流れ込んだ「大正生命主義」²¹がどのように海外に波及し再創されたのかという問題や、現在でもマスメディアでくり返し再生産・消費される「日本人＝武術の達人」というようなイメージも含めて、メディア研究の成果もふまえながら、考察されるべきテーマである。

④中国系・韓国系住民のプレゼンスの拡大

ブラジルにおける中国系・韓国系住民のプレゼンスの拡大もたいへん興味深い。2006年2月、東洋街において中国系団体による「春節祭」がはじまったが、2007年の2回目で観客数が15万人を超え、七夕祭りと並ぶかそれ以上の規模の文化表象となった。この春節祭には、実は日系人が深く関わっており、先に述べた東洋街における四つの新伝統行事のノウハウが生かされ、日系コミュニティと無縁に創出されたものではない。ブラジルでは北米のように「アジア」というエスニック・カテゴリーや「アジア文化」といった概念は一般化されていないものの、ブラジルにおける「日本文化」の展開を考える場合、これらニューカマーの文化表象も視野に入れたより広範な研究も必要となろう。ブラジルの中国系・韓国系文化に関する課題は、文献資料も乏しく、オーラル・ヒストリーに依拠する割合がひじょうに大きくなると考えられ、早急の対策が必要である。

⑤沖縄系エスニック・ムーブメント

ブラジルには日本の出身地別親睦組織である都道府県人会が存在するが、沖縄県人会の活動は群を抜いて活発である。沖縄県出身の移民は1908年の第1回移民からすでに多数存在したが、ブラジル日系コミュニティの中では、長く周縁的な位置付けがされてきた。ブラジルの「日本文化」表象の中で、周縁化されてきた彼らの言語（ウチーナグチ）・料理・舞踊・音楽・武道がそのエスニック・シンボルとして作用し、現在では日系コミュニティの中で、あるいはその枠を越えて、独自性を持った一大勢力としてプレゼンスを高めている。これは最近、沖縄系としてのエスニック・アイデンティティのポジティブな意識化が進んだこと、世界のウチナンチュ大会に見られるような沖縄系ネットワークのグローバル化が進展したことを背景とする。琉球国祭り太鼓のような新伝統芸能も活発化してきており、ブラジルの「日本文化」や「日系文化」の枠組みを揺るがす存在として注目される。

⑥J-POPの爆発的流行

さらに、本稿第4節でも述べたが、90年代後半からのJ-POPの爆発的流行をめぐる問題である。日系マンガ・アニメ愛好グループ「アニマンガ」が上記の七夕祭りに参加し、七夕飾りコンテストで入賞していることや、日本で開催される「世界コ

21 近代化のプロセスで日本武道の変革の思想的背景となった「大正生命主義」については、鈴木貞美「日本武道の形成と大正生命主義：阿波研造の弓道を視点として」2003
< <http://www.nichibun.ac.jp/~sadami/extract/budo/budo2.htm> >などで問題化されている。

スプレサミット」でブラジル代表が毎年上位入賞する²²など、文化の担い手はズレているように見えながら、重なり合い支えあっている部分もある。そんな中、「日本文化」受容の経路も消費者も多様化している。こうした必ずしも日系コミュニティを経由しない文化表象の拡大をどのように評価し、「日本文化」研究の中に位置付けるかという問題も、今後の重要なテーマとなろう。

急速に進むグローバル化の中で、われわれはもはや異文化との接触や摩擦を避けることはできない。ますます多様化し拡散していくブラジルにおける「日本文化」表象に対して、研究者自身も柔軟な対応が迫られている。2008年のブラジル日本移民百周年は、日本人が（あるいは日本文化が）新世界に参加し発展してきた意義を再考する絶好の機会であると考えてるのである。

22 「世界コスプレサミット 2006」では、ブラジルチームが優勝した。（「コスサミ News」
<<http://www.tv-aichi.co.jp/wcs/2006/j/>>）